

就職ガイダンスにおける学生の意識調査と就職指導

眞野容子, 金森きよ子, 川上保子, 鈴木敏恵, 下村弘治, 工藤秀機

文京学院大学 保健医療技術学部 臨床検査学科

要旨

本研究は、臨床検査技師を目指す本学3、4年生を対象に就職ガイダンスを実施し、その有用性について検証することを目的とした。大学における就職支援評価の一環として就職ガイダンスにおける学生の意識について質問紙法による調査を行った。

その結果、有資格者講演、採用担当者講演ともに有意義と感じ、病院勤務の臨床検査技師に留まらず専門職でありながら多方面に就職先の選択肢が拡大されたと感じる学生が増加した。さらに、国家試験に対する合格への意欲が高まる結果が得られた。

以上のことより就職ガイダンスは学生の就職に対する認識の向上と、国家試験合格へのモチベーションの上昇が確認され有用であることが明らかとなり、実施時期も適切であると分かった。今後も学生の就職に対する意識の動向の継続的な調査が必要だと考えられた。

キーワード

就職ガイダンス, 就職指導, 自己分析, 臨床検査技師国家試験

1. 序論

我が国の近年における4年制大学の就職状況は、新卒者への求人が激減し就職氷河期の1990年代と比較すると求人は増加し就職環境は改善してきた。それにもかかわらず、大学卒業時に就職も進学も決定していない「無業者」の比率は1990年代当初の水準には戻っていない¹⁾。文部科学省と厚生労働省の統計によると2011年3月に卒業した大学生の就職率は91.1%であり、1997年以降で最低を記録した²⁾。さらに急速な高齢化も伴い、現代医療は生命科学や生命倫理など学問の著しい進歩を基盤とし大きな発展を遂げてきた。

このような社会情勢の中、医療職の国家資格取得を目指す学生が増加している。つまり就職に有利であるという観点から大学を選択しているにもかかわらず、本学入学時に

臨床検査業務についての知識が乏しい学生も増加している。本学は医療の高度化、専門化に伴い、その役割が重要になってきているチーム医療の一員となる臨床検査技師の育成を行っている。高い倫理観と高度な技能を兼ね備えた医療人を目指し、医療専門職に就くための教育を実施している。平成12年に臨床検査技師学校養成施設指定規則が改正され、臨床検査技師国家試験は平成15年3月の第49回国家試験より新国家試験出題基準に基づいた出題がなされている³⁾。その内容の骨子は「卒前教育の目標と内容をふまえ実習等の具体的な教育内容も重視し、検査業務全般を取り扱う技術者として第一歩を踏み出すに足る基本的な知識及び技能を的確に評価できるもの」となっている⁴⁾。そのため、臨床検査技師の国家試験は大変難しく、ここ数年間の合格率は70%前後であり、医療系国家試験の中で低合格率となっているため、能力を持つ人でもかなりの

努力と国家試験に向けて万全な準備が必要になってきている。臨床検査技師になる志の低い新生生にとっては入学当初から厳しいカリキュラムでの教育が始まるため、国家試験への合格や就職活動を積極的に展開するためのモチベーションを上げるには適切な時期に就職ガイダンスの実施が重要である。

臨床検査技師が不足していた昭和40年代、50年代には引く手あまたであった就職も、国公立病院では1名の募集に対して数十倍もの応募があるという現状である⁵⁾。昨今の医療改革推進の中で臨床検査技師の需給関係は他の医療職種に比べ病院からの正規雇用での需要が減少し契約雇用が増加してきている。ところが、学生の病院への正規就職志望は根強く就職競争の激化を招いている。

以上のことから、就職先の選択肢の拡大と国家試験に対する合格へのモチベーションを高めることを目的に就職ガイダンスを実施しその有用性を検討した。

2. 方法

2.1 就職ガイダンスの実施概要

3、4年生を対象に講師は臨床検査技師有資格者と採用担当者による2部構成で講演会を実施した。ガイダンスの開催は平成23年7月に行った。第1部は臨床検査技師の資格者で大学病院・一般病院、検査センター・検診センター、医療関連企業営業部・学術部、スポーツ医学研究部、角膜センター・アイバンク、エンブリオロジスト、科学捜査研究所に勤務する講演者を招いた。第2部では、採用担当者として病院検査部技師長、人事部教育採用グループ長、医療関連企業営業所主任、事務局長などによる講演を依頼した。

有資格者には本学卒業生にも講演を依頼し、国家試験勉強に対する経験談も交えた内容を含めた講演を依頼した。さらに第3部として講演会終了後に講演者と教員・学生を交えた情報交換会を開催し、講演中には確認できなかったことなど質問する場を設けた。

2.2 調査方法

就職ガイダンス終了後に質問紙法によるアンケート調査を行い、ガイダンスに対する意見や要望は記述式にて記入欄を設けた。アンケートは無記名でデータは平成23年度3・4年生を対象に実施した(表1)。質問紙の構成は回答が肯定的か否定的かを判定する5項目の質問と選択肢から自由に選択する2項目の質問とした。

2.3 倫理的配慮

本調査を実施するにあたり調査研究目的を対象の学生には口頭で説明した。その際、個人が特定されないように十分注意を払うことを伝え、了承を得て実施した。

2.4 統計処理

ガイダンスの実施が必要だと回答した学生の就職に対する対策意欲や国家試験へのモチベーションを、IBMの統計解析ソフトウェアSPSSによるクロス集計を用いて統計的に処理した。

3. 結果

アンケート調査集計結果

各調査項目に対する集計結果を表1に示した。

ガイダンスの出席者は3年生75人、4年生61人でアンケート回収率は3年生68/75人(91%)、4年生61/61人(100%)であった(図1)。

「3. 就職ガイダンスの実施は必要と思いますか。」との質問に大変そう思う、そう思うと回答した学生を合わせると3・4年生ともに100%であった。「4. 就職の対策を今までもってきていますか。」との質問に大変してきた、してきたと回答した学生を合わせると3年生28%、4年生51%であった。「5. 就職のための対策を今回のガイダンスを機にすべきと思いませんか。」との質問に大変すべき、すべきと回答した学生を合わせると3年生99%、4年生97%であった。クロス集計を用いて解析したところ、ガイダンスの必要性と就職対策の必要性は非常に関連性があるとの結果が得られた。「6. 就職には何が必要だと思いますか。」の質問の回答は「人間的な資質」と答えた学生が3・4年生ともに54%と半数以上を占めていた。「7. 就職に英語力の必要性を感じますか。」との質問に大変必要である、必要であると回答した学生を合わせると3年生95%、4年生67%であった。「8. 国家試験に対するモチベーションは上がりましたか。」との質問に大変上がった、上がったと回答した学生を合わせると3年生99%、4年生92%であった。クロス集計を用いて解析したところ、ガイダンスの必要性と国家試験のモチベーションの上昇とは密接な関連性があるとの結果が得られた。「9. 今後の進路としてどれに興味がありますか。」との質問の回答は大学病院、一般病院を合わせると3年生62%、4年生56%であった。進学と回答する学生は3・4年生ともに10%であった。

記述式の意見や要望には「病院勤務の臨床検査技師以外に多方面の職種があることがわかった。」「病院での臨床検

表1 アンケート内容と集計結果

内容		3年生	4年生
1 学年を教えてください		75名	61名
2 性別を教えてください		男:13 女:62	男:12 女:49
3 就職ガイダンスの実施は必要と思いますか？	大変そう思う	51%	56%
	そう思う	49%	44%
	思わない	0%	0%
4 就職のための対策を今までもしてきていますか？	大変そう思う	1%	3%
	そう思う	27%	48%
	思わない	72%	49%
5 就職のための対策を今回のガイダンスを機にすべきと思いましたか？	大変そう思う	40%	51%
	そう思う	59%	46%
	思わない	1%	3%
6 就職には何が必要だと思いますか？	学力	29%	16%
	面接態度	12%	18%
	人間的な資質	54%	54%
	履歴書の書き方	5%	12%
7 就職に英語力の必要性を感じますか？	大変そう思う	19%	5%
	そう思う	76%	62%
	思わない	5%	33%
8 国家試験に対するモチベーションは上がりましたか？	大変そう思う	27%	31%
	そう思う	72%	61%
	思わない	1%	8%
9 今後の進路としてどれに興味がありますか？	大学病院	28%	27%
	一般病院	34%	29%
	検査・検診センター	17%	25%
	医療関連企業	11%	9%
	進学	10%	10%

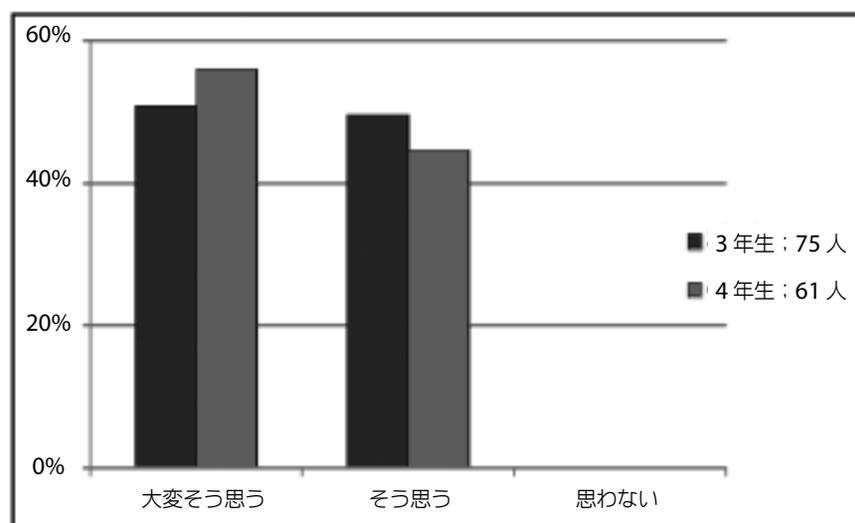


図1 就職ガイダンスの実施の必要性

査技師イメージが大半だったが、ガイダンスを通じて資格を生かし他の分野でも活躍できることを知り、興味を持った。「検査センターは事務部門でのキャリアを目指せるように感じた。」などという記述もあった。

4. 考察

我が国においては急速な高齢化から高齢者雇用問題に関心が高まる一方、新卒無業者、ニートの増加など若者の高い失業率など若年層をめぐる雇用問題が現在の大きな課題となっている⁶⁾。医療の世界に目を向けてみると、現代医療は生命科学や生命倫理学など学問の進歩を基盤に大きな発展をしてきた。しかし、一方では医療の質やシステム効率の向上による課題も発生し、医療の経済的、構造的、および教育的改革がなされている。こうした背景から多くの医療職も就職難に陥ってきている。臨床検査技師の正規雇用が減少した要因には、医療施設など職場環境の変化があげられる。病院経営では検体検査外注化の増加や、設備投資の停滞などに伴い検査室の弱体化が考えられる。さらに学生の視点では就職に対する意識の不足が考えられ、仕事に対して誇りや夢を持っている学生は何人いるだろうか。

このように、臨床検査技師の就職は様々な課題を抱えており個別での就職指導では方策の効果は得られにくいため、就職ガイダンスによる3・4年生への同時周知を実施し、その有用性を検討した。

就職ガイダンスの必要性は、3・4年生ともに100%の学生が認めていることがわかった(図1)。

今回の就職ガイダンスでは病院勤務の臨床検査技師の他、資格を生かしながら医療関連企業営業部・学術部や角膜センター・アイバンク、科学捜査研究所などで働いている臨床検査技師に講演をお願いしたこともあり、学生には多くの職種を紹介できた。このことはアンケート調査の結果にも反映されており、就職先の選択肢が確実に広がったことは大きな効果であった。大学における進路指導について、今回の就職ガイダンスでは講演形式であったため受動的な学生が多かったが、ガイダンス前は就職のための対策をしてきた学生は3年生28%、4年生51%であった割合が、ガイダンス後には対策への意欲が3年生99%、4年生97%と大幅に上がった。このことより、ガイダンスは受動的な学生の就職や国家試験へのモチベーションを高めた事実は明らかとなった。

今回の就職ガイダンスを通して学生の就職に対する意識や視野を広めることは可能であることが明確となったが、就職活動を行うにあたって自己分析などの指導も重要な要

素の一つである。自己分析とは人生を振り返り自分が感じたこと、自分の強み・弱みを掘り下げて考える作業のことで、作業する中で自分の興味や関心を自己認識し、どのような仕事をしたいのか明確化していくとされている⁷⁾。本学科では入学当初から臨床検査技師を目指していることは間違いなく、検体部門または生理部門、さらに病院、検査センター、検診センター、研究室など、どの分野に就職するのか3年生のうちから自己分析をするよう指導することで職場選択の援助が可能だと考えられる。

他大学の就職ガイダンスはキャリアセンター主催で開催されていることが多く、その内容は1. 進路選択について、2. 業種や職種研究の方法、3. 履歴書の書き方、4. 自己分析、5. 企業説明会であり数回にわたって実施されている。本学は1.2のような職種に関する項目は実施しておらず3以降の項目については他大学と同様に実施している。企業説明会に相当する就職ガイダンスは臨床検査学科教員の就職委員の方がキャリアセンターより就職先のコンタクトがとりやすいことから学科と共同で主催している。その点での違いは認められるが、本学の就職ガイダンスは他大学、他学部とほぼ同様の内容で開催されている。また、ガイダンスを実施することで就職内定率が上昇したとの報告もあり^{8,9)}、ガイダンスの実施は他大学においても有用性があるとの判断をしている。

文部省の職業指導の定義では「個人が職業を選択し、その準備をし、就職し、進歩するのを援助する過程である」と述べている¹⁰⁾ことから、これまでの就職ガイダンスに加え今後の就職・進路指導は、学生の能力や適性の把握と伸長、進路の選択と決定への援助も教育的機能として目指すべきであると考えている。

さらに臨床検査技師教育は大学院教育制度も普及するという改革期の現在、大学側の就職先の確保も非常に大切である。本学の就職先の推移は北島らの報告によると平成6年より病院の正規雇用形態での求人が減少し、検査センターを中心に他分野化が広がってきている。さらに雇用形態も診療報酬改定の影響により正規雇用から契約雇用に移行しつつある⁵⁾。この危機を打破するためには医療機関と大学との人事における関係を密接にすること、そのためには医療機関訪問なども重要な活動である。優良病院や新たな職場改革のために大学のキャリアや教育内容を紹介することで採用側にレベルの高い人材を育成していることをアピールすることも我々教員の使命ではないだろうか。

5. 結語

今回のアンケート調査から、就職ガイダンスは学生にとって就職先のイメージの拡大と国家試験に対する意識を向上させるという目的が達成できた。今後は、学生との面談などの場を通じてきめ細やかなサポートをして個人の適性に合った就職先の提示も必要であると考えられる。

引用文献

- 1) 小杉礼子編, 大学生の就職とキャリア「普通」の就活・個別の支援, 2007, 勁草書房
- 2) 池上彰著, 池上彰の就職読本～就職難もまたチャンス～, 2011, オクムラ書店
- 3) 平成 23 年版臨床検査技師国会試験出題基準, 2011, 厚生労働省医政局医事課
- 4) 日本臨床衛生検査技師会史一創立 55 周年・法人化 45 周年・法改正記念—法改正運動の軌跡, 2008, 社団法人日本臨床衛生検査技師会
- 5) 北島みよ子, 臨床検査技師の就職動向と将来展望, 文京学院大学大学院経営学研究科経営学専攻, 2006, 医療システム演習修士論文
- 6) 谷内篤博, 大学生の職業意識とキャリア教育, 2005, 勁草書房
- 7) 矢下茂雄, 大卒無業 就職の壁を突破する本, 2006, 文藝春秋
- 8) 札幌学院大学就職指導, 2010, 札幌学院大学就職委員会
- 9) 静岡産業技術専門学校 評価報告書, 2011
- 10) 吉田辰雄, 就職指導・キャリア教育の理論と実践, 2007, 日本文化科学社

An Attitude Survey of the Career-Seeking Students -a Comparison between before and after the Job Placement Guidance

Yoko Mano, Kiyoko Kanamori, Yasuko Kawakami, Satoe Suzuki,
Hiroji Shimomura, Hideki Kudo

Department of Clinical Laboratory Medicine, Faculty of Health Science Technology,
Bunkyo Gakuin University

Abstract

In this study we verified whether the job placement guidance is valuable for students in the third or fourth grade of the clinical laboratory medicine to get their national licences and jobs as medical technologist. An attitude survey was made by questionnaire method of the attendants at the guidance. As a result, lectures given by qualified persons and recruitment officers both proved worthwhile in that quite a few students increased the choice of their next steps after university. In addition, their motivation was enhanced to pass the national examination. In conclusion, job placement guidance was confirmed effective for career-seeking students. A periodic attitude survey of job-seeking students would be of importance. We need to keep watching the trends of attitude of job-seeking students for future reference.

Key words —— job placement guidance, vocational guidance, self-analysis, medical technologist national examination

Bunkyo Journal of Health Science Technology vol.5: 25-30